

日本における世界自然遺産への取り組み：研究・教育と実践

渡辺 悌二

(北海道大学大学院地球環境科学研究院)

「いつの間にこんなに出版されたのだろう……」と驚くほど、たくさんの世界遺産関連の本が書店に並ぶようになった。出版業界やテレビ・ラジオなどで世界遺産が取り上げられる機会は、加速度的に増加しており、その結果、世界遺産は格段と知名度をあげるようになった。観光業界でも大きな注目を集め、観光対象地として重要な役割を果たすようになってきている。世界遺産は今や産業構造の中に組み込まれ、巨大なお金を動かす存在となっているのである。

一方、世界遺産に関する学術的な取り組みは、いわゆる打ち上げ花火的なシンポジウムの開催などから、より長期的な研究や教育といった段階に移りつつあるように思われる。13編の論文からなるこの特集号は、世界自然遺産に対する日本の取り組みをまとめたもので、研究、教育、実践に焦点をあてた議論が行われている。執筆者は、環境省の世界自然遺産専門官、世界自然遺産に関する国際的な委員会などに日本の代表として参加する立場の専門家、シンクタンクで世界遺産の調査・分析を行う専門家、現地で教育や管理に汗を流す研究者・行政・団体などの中核的なメンバーや代表者、エコツーリズムや観光業界の関係者、世界の多くの世界自然遺産をたずね歩いている登山家など、きわめて多彩な顔ぶれからなっている。

世界遺産は、自然遺産、文化遺産あるいは複合遺産を問わず、観光と結びつくことが多い。世界自然遺産に関する研究・教育は、ユネスコのジオパーク(『地球環境』Vol. 10, No. 2 参照)の普及を含めて、地域開発と環境保護・保全の関係を議論する際に、今後、重要度が増すものと考えられる。このことは、大学において世界遺産を扱う学部・学科・大学院の専攻ができていたり、「世界遺産学」が提唱されるようになってきていることから容易に理解できるだろう。

この特集号では対象としなかった世界文化遺産も、その保全においては環境問題と強く結びついている場合が多い。たとえば、災害や風化から文化遺産をどのように守ってゆくかが大きな問題となっている。こうした文化遺産の環境問題については、改めて特集を組む機会があるかもしれない。

なお、最後の「観光の視点からみた世界自然遺産」は、2007年9月7日に国際環境研究協会が開いた「座談会」の場で執筆者らが議論を行うことによって生まれたものである。世界自然遺産をめぐるのは、異分野の専門家からなるシンポジウムやワークショップが盛んに開催されるようになってきてはいるものの、世界遺産に関する研究や教育は、特定の分野や個人・団体が単独で行うことが多く、総合的な共同研究はいまだ限られている。こうした背景から、異分野の専門家からなる「座談会」が開かれることとなり、その内容が1編の論文としてまとめられた。「座談会」の場を提供してくださった(社)国際環境研究協会に感謝したい。

